カリフォルニアの風（１２月号）

「挑戦」

　補習校がお休みの土曜日、あなたは何をして過ごしましたか。
　午後の弱い陽ざしをあびながら本を読んで過ごしました、というお友だちもいたでしょう。
　読書って、楽しいね！登場人物の感情表現に共感したり魅力を感じたりできるから。読書をすると、自分の意思を表現するために適切な言葉を運用する力が身についていくと思います。

　さて去る６月、海外子女文芸作品コンクール「作文・詩・短歌・俳句」に１２２人の子どもたちが「挑戦」してきたことを紹介いたしました。
　いずれの作品も着眼がすばらしく、子どもたちのしなやかな感性が感じられる力作でした。自分で着眼し、構想を練り、読み手に伝わるように表現するのは、むずかしい行いです。挑戦した子どもたち一人ひとり、「本当に、よくがんばった！」と、心の中で強く感じていました。
　この度、世界各地から応募があった作品について、一次二次の審査をへて、本校では「五つの作品」が賞に選ばれました。それらの作品を、学年の小さいお子さんから順に、詩、作文の順で紹介いたします。それぞれの作品の最後に、書き始めた理由や着眼点を添えています。
　ホリデーシーズン最中、家庭で読み合い、わくわくしたり、へえっと驚いたり、面白さを感じたり、話題にしていただいたり、日本語で学ぶ機会にしていただけましたらうれしいです。

「詩」の部

　題名「なんだかへん」　（小学１年）

エミリーせんせいへ
いつもえいごをおしえてくれて
ありがとう
きょうはわたしがせんせいです
にほんごをおしえます

「ようこそ」は
きてくれてありがとう、といういみ
たとえば
あたらしいおともだちが
はじめてがっこうにきたとき
おとうさんやおかあさんが
がっこうにあそびにきたとき
だれかがちがうくにからきたとき

「ようこそ」っていえば
みんなにこにこ

「いらっしゃいませ」も
きてくれてありがとう、といういみ
だけど、
ようこそとはちょっとちがう
いらっしゃいませは
おみせやさんがいうことば
こうちょうせんせいに
「いらっしゃいませ」
といわれたら、なんだかへん
おかいものをしているみたいだから

きょねん、がっこうのおまつりで
わたしはみんなのまえでいった
「いらっしゃいませ」
なんだかへん、とおもったけれど
せんせいがそういってね、といったから
ちいさなこえでいった

ことし、がっこうのおまつりで
わたしはげんきよくいった
「ようこそ！」
いらっしゃいませは
おみせやさんだよって
せんせいにいえたから

わたしはにほんごのほうがすき
でも、えいごもはなせるようになって
たのしいな
にほんからアメリカにきて
あたらしいおともだちが
いっぱいできたよ

エミリーせんせい、ありがとう

「エミリー先生に、もっとにほんごをおしえてあげたいとおもいました。」

題名「やっとみつけた」　（小学２年）

「あれ　もしかして」

よくみえなかった
たいようがのぼるまえ
空にはまだ月がいた

きょうこそはあいたいな

たくさんあるいた
あせをかいた
木の下でお水休けい

「あっ　青いとりだ」

ほんとうに青かった
はねをひろげると
クレーターレイクの青
あたまはくろくて
おとうさんみたいなとんがり
あたま
「コロコロコロ
　グワァグワァ」って
おもしろいなき声
みんなでわらっちゃった

はねをとじるとくらい青
森のみどりにかくれちゃう
だから今まであえなかったんだ

これからは
なき声をたよりにさがそう
またあいたいな青いとり

「青い鳥を見つけた時のワクワクをみんなに伝えようと思って書きました。」

題名「心に残ったいわし」　（小学５年）

色はぎん
青緑色にかがやいている
夜の水面みたいにひかっている
いわし　いわし　いわし

形はよこなが
手のひらぐらい小さく
刀みたいにほそながく
いわし　いわし　いわし

様子ははくりょく満点
一ぴきじゃ小さい
群れでは大きい
いわし　いわし　いわし

いわしのふしぎ
水面の近くをおよぐのがふしぎ
ふしぎにつつまれたいわし
いわし　いわし　いわし

いわし　いわし　いわし
いわし　いわし　いわし
いわし　いわし　いわし
いわしの群れ

「夏休みもあと三週間ほどで、詩は書き始めてもない。「よし、詩を書こう。」と思っても、全くアイデアなし。その前の日は水族館へ行った。最初は一番印象に残ったサメについて書こうと思った。でもあまり覚えていない。だから、一番覚えていたいわしについて書いた。」

題名「星あめ」　（小学６年）

ころころかわいい
小さな星
いろんな色の
小さな星たち
見ているだけで楽しくなる
「星あめおいしいね」って
日本のおばあちゃんに言うと
「干したあめってどんなあめ？」
家族みんなで大笑い
日本語ってふくざつ
びんの中の星たちは
私が好きな金平糖

「私がこの詩を書いたのは、初めて金平糖を食べたときのことがきっかけです。祖母は同じ発音の全く別のものだと思い込んでいました。

　そのかん違いがとても面白くて、二人で大笑いしました。「日本語って本当に複雑で、同じ発音でも意味が全然違う言葉がたくさんあるよね」と話しました。

　漢字を見ないと分からないことが多いなと思いました。

　この賞をもらってとても嬉しくて、祖母に連絡しました。」

「作文」の部

題名「身近な問題で手いっぱい」　（小学６年）

「では、トラックのドアを開けますね。」
みんなが一番わくわくするしゅん間だった。
さっきまでさわがしかった話し声がピタッと止まり、みんなは前を向いた。ゆっくりととびらが上がり。中には牛が一頭入っていた。
今日、私が通っている小学校に牛がやってきた。今の小学校に通い始めて六年目だが、これまで学校に牛がやってきたことはない。
だから、みんなは、教室にいるときからずっとそわそわしていた。みんなが、
「早めに行きたい。」
「前のほうにすわりたい。」
とブーブー言ったので、先生は五分前に外に行かせてくれた。
まず、牧場の人が牛のライフサイクルについて説明をした。出産した後は、十か月ほど毎日数回さく乳し、その後は次の出産にひかえ、数か月体を休ませる。出産から次の出産までのサイクルは一年ちょっとあり、これを三、四回くり返す。乳をしぼらなくなった牛やおすの子牛は食肉に利用されるとのこと。
他に、しぼられた乳が店舗に並ぶまでにどんな経路をたどるのかということも学んだ。たくさんの人が働いてくれているおかげで私たちは毎日学校で牛乳が飲めている。これはありがたいことなのだと改めて思った。
私は、学校からの帰り道、もやもやとした。牛は人間に利用されているだけなんだなと。それなのに、給食で牛乳を捨てている子供たちが多すぎる。学校では、牛乳を取ったらもどせないルールになっているので、取ってから気が変わって箱を開けないまま捨てる子も少なくない。どうしてこれが大きな問題にならないのだろう。アメリカの小学校では、たん任の先生といっしょに給食を食べる習慣はない。先生は昼休けいをとり、その間、子供たちは学年ごとに交代しながらランチテーブルで給食やお弁当を食べる。昼休み当番の人が代わりに子供たちの世話をする。ごみを捨てずに遊具に遊びに行く子が多いのが問題になっている。当番の人たちはごみを捨てる声がけで手いっぱいなのかもしれない。学校には「自分が出したごみは必ず捨てよう」というポスターははってあるが、「ごみの量を減らそう」とか「食べ物は捨てないように」と呼びかけるポスターはない。ごみといっしょにたくさんの食べ物が捨てられていることは問題とされていないように見える。
牛が来校した次の日には、いつもより牛乳を捨てた人が少ないと感じた。でも、一週間たつとまた元通り。かんたんに解決できる問題ではない。
去年日本で体験入学をしたとき、たん任の先生が、
「残さず食べるように。」
とよく声をかけていた。牛乳を開けないまま捨てる子は一人も見かけなかった。先生の毎日の声がけの効果もある気がする。

高校生の姉は、高校でSDGｓ（持続可能な開発目標）のクラブを作った。アメリカではSDGｓのことを知っている人は少ない。ＳＤＧｓには、２０３０年までに達成すべき１７の目標がかかげられている。その目標１２に「つくる責任　つかう責任」というものがあることを知った。世界で生産されている食品の約３分の１（１３億トン）が捨てられていて、２０３０年までに、お店や消費者のところで捨てられる食料を半分に減らすという目標である。こういう話を学校で伝え続けることが大事なんじゃないかな。世界のいろいろな問題についてまずは知ることから始めることかな。

今回、牛が学校に来たことをきっかけに、牛が人間のために利用されているのに、子供たちは何とも思わず牛乳をごみ箱の中に入れていることが大きな問題だと感じた。ただ、学校では、ごみの片づけができない子供たちの指導に力を入れていて、もっと大きな世界のごみ問題、食品ロス問題の解決に取り組めていない。この問題はとても難しい。学校にとっては、世界のごみ問題よりも校舎をきれいに保つことのほうが大事なのである。でも、みんながそのように行動したら世界の問題は解決方向に向かわない。まずは身近な問題に取り組み、スケールを広げていく。やり方はまちがっていないような気がする。ただ、一人一人が身近な問題にかかりっきりで、２０３０年までにＳＤＧｓ目標達成に間に合うのか。アメリカは、まだ一度も国連に取り組み状きょうを報告していなくて問題になっているようだ。どうすればよいのか。これからこのような問題についていろいろな人と話し合ったり調査をしながら考えていきたい。

「作品を書いた時の思いです。

学校に牛が来た時に、牛についてのことをたくさん学んだのに、多くの子供たちが牛乳を捨てていて、なんとも思っていない様子なので、悲しくなりました。この問題について、少しでも多くの人に知ってもらいたいと思い、書きました。」

子どもらしい素直な好奇心から、書こうとする意欲が生み出され、日本語で表現しようと挑戦した姿が目に浮かびます。

そのとなりには日本語に表現する際、励ましてくださっているお家の人たちのお姿も。

これからも、お子さんが見つけた題材が、すくすく育ち、作品となって実が結ぶことを心から願っています。そのために、文章の構成や、語彙、文法など、日本語の知識などが高められるよう、先生方には「子どもたちに日本語で学ぶ楽しさを実感させる」授業づくりに、来年も一層努めていただくことをお願いしなければ、それを今、強く感じています。

師走を迎えました。言葉にするにはまだ早いかもしれませんが、良いお年をお迎えください。

来年もどうぞよろしくお願いいたします。